

SADA

SAKAI DESIGN ASSOCIATION

堺デザイン協会

NO. 18
1997年12月



平成9年9月29日、八尾空港よりこの風景が撮りたくて飛び立った。あいにく上空500mは白くガスっていた。我々が世界に誇る仁徳天皇陵は社大で、手前の大仙公園もみどりが根ずき、御陵とよくマッチして見えた。

(岡本安吉)

堺の街の顔

岡村 筈

このところ、80万都市堺の人口がやや下降ぎみである。堺は住んでよい街か、訪れてよい街か、個性があるか。今年、なみはや国体が行われ、それにあわせて大池体育館が出来たり、道が整備されたり、支所の建物も出来てきた。政令指定都市へのアプローチは着々と進んでいるように見える。ウワモノと称する容器作りは目に見えて誰にでも解りやすい。何の目的で、どのような機能の、どのような形のと、これも概して計画に添っている。又それらの新建築に対して、景観賞を設けて意識を促進しているが、街づくりや都市計画全体としてはどうだろうか。行政で出来ることには自ずと限度がある。しからば我々民間人が、もっと具体的に勇敢にアイデアを出し実行していくことではどうか。

一つの提案として、現在出来たばかりの新しい建物や、これから計画される建物も大切だが、既にあるそれ以外の建物や施設、それらの風景や昔の価値ある建物に対して今ある姿のまま、そして生活をしながら景観として守っていく方法、言い換えれば積極的に活用していくことこそ、現実には即した都市計画ではないか。

当協会の岡本安吉さんより「建物バンク制度」の提案があり、時を同じくして私も堺の街並みの中に残る昔の姿を、筋ごとに記録してみたいという想いを持っていた。まず自分の生まれ育った土居川筋の



農人町を戎之町から、北は高須神社のあたりまで歩いてみたが、ついこの前までであった独特の中二階の建物はその間にはたった一軒しか残っていませんでした。

手元で大正十一年発行の堺市勢一斑という地図がある。それによると人口約九



万人現在の十分の一である。その他土地、気象、教育、交通に加えて明治三十六年の内国勲業博覧会当時に来た堺水族館、旧堺奉行所跡にあった堺市役所などが掲載されている。堺市は、まだ土居川で囲まれた昔の堺の姿をとどめている。岡本さんの建物バンク提案が、点とすれば筋は線となり次第に面にも広がって行く。この古い地図を眺めていると、ついこの前までであった堺の姿が何となく見えてくる。

最近になってようやく堺市も文化課がアートディレクター制度を取り入れた。これは堺市が出版する各種印刷物のアートに対するアドバイスをする仕組みである。予算規模のごく小さい事業の中では、計画の中にデザインやアートを入れる余地がない。10万円の印刷物のデザインは当然そうなるのかもしれない。少し大きな事業になるとその予算の中で何らかのデザインが行なわれている。しかしそれは個々別々で、堺市としての一本化されたアイデンティティーが見えてこない。この制度をやりかかってみるとその基本になるべきところも未だに未整理であることが解る。市章が制定されてから随分永い年月が経つが市章そのものの製図はあるが、それを使う規定や市のアイデンティティーを活かそうとする前向きな極力がない。なんの文化遺産も持ち合わせない市町村ですら結構頑張っているところが増えてきた。だからこそケシの一粒ではあるが、文化に対する具体的

取組みとして歓迎である。非常にいいことに、この企画や計画の中でそれぞれの担当者と接触できること、デザインやアートに対する関心が生まれてくることだ。

もう一つ地に足のついた着実な動きがある。泉州のミュージアムネットワークで泉州近在の公私立、大小を問わずミュージアムがネットワークをつくりお互いの接点を探り始めた。それぞれの横のつながりも有効だが、訪れる人の立場からこんな近くにこんな所があったのかという効果が大きい。文化に対する取組みは難しいが意識してやらねば勝手にできてるものではない。



第14回通常総会報告

事務局

平成9年5月30日堺デザイン協会通常総会が堺市内JR堺市駅近くのサンスクエア堺にて午後6時30分より開催された。

会は山崎理事の発声により始まり、司会を館野さんに指名され、当日の出席者が15名、委任状が14通、計29名は総数42名の2分の1以上であり、本会が有効に成立することを事務局が述べた。議事録署名人に岡本安吉氏、崎田公明氏が指名された。次に議長には岡村理事長が当会規則20条により選出され、本会の開催挨拶を述べ、祝電披露、来賓の紹介がなされ、議事にはいった。

第一号議案の平成8年度事業報告は上野理事より報告があり、収支決算報告は高木副理事長が報告。本来ならば会計理事の森理事が報告すべき所が事情のため、やむなくその引き継ぎをした旨を釈明し、その決算が適性であるとの報告を金子監事がした。

第二号議案の平成9年度事業計画案を上野理事が報告し、収支予算案を高木副理事長が報告。

議長は質疑応答を行った。平成8年度会報SaDAが発行されなかった理由を説明。

第三号議案の役員改選は森監事より選挙結果について報告があり、新理事、新監事の披露、理事長選出のため、理事は別室に移り互選する。部屋に戻り、岡村理事長が再任され、高木副理事長が再任との報告をする。新理事・新監事は次のとおりである。

理事長	岡村	筈
副理事長	高木	外
理事	上野	あきら
理事	北川	正
理事	崎田	公明
理事	館野	羊一
理事	山崎	晶
監事	金子	誠之助
監事	森	達男

最後に高木副理事長が挨拶を述べ、閉会した。

総会終了後、別室で懇親会を行った。堺市から永井克智文化振興部長、南大阪地場産業振興センターから諸農正和専務理事、堺市中小企業振興会から北村虔司事務局長、堺商工会議所から鈴木隆夫振興部長がご臨席賜り親しく懇談した。



懇親会で永井文化振興部長のご挨拶

堺と泉州の俳諧

永野 仁

現在の俳句のもとには江戸時代の俳諧であり、そのまた源流は室町時代に完成した連歌です。

連歌と俳諧は形が同じです。5・7・5（長句）に7・7（短句）を付け、これを百句（あるいは五十句、三十六句）続けたのを百韻（五十韻、歌仙）と呼びます。複数の人がかわりばんこに詠みますので、自分の句をつぎの人がどんな風に解釈するか、どんな新しい展開（変化）を実現するかというところが面白いのです。

連歌で使う言葉は古典語（雅語）に限定されてきました。それにたいし、現代語（日常語、俗語）を使うのが俳諧です。俳諧の味わいは滑稽、ユーモアにあります。たとえば、「切りたくもあり切りたくもなし」という前句に「盗人をとらへて見れば我が子なり」と付けると、ナルホドとお互いに大笑い。

——これが室町時代の俳諧でした。

江戸時代に入って木版印刷が盛んになり、古典が民衆に公開され、識字率が上昇したとき、民衆の表現意欲は日常語を使って笑いに興じる俳諧に集中しました。

さて、堺では室町期、15世紀なかばに開口神社で連歌会が定期的に行われていました。江戸時代には堺天神を拠点にいっそうさかんとなり、この連歌壇の中から俳諧のリーダーが現われました。

江戸時代最初の俳諧撰集『犬子集』は京都で編集されたものですが、入集者は伊勢山田100人、京51人について三位が堺の19人です。次の『崑山集』に堺は何と144人です。17世紀半ば、堺は俳諧の先進地帯の一つだったのです。

堺でたくさんの撰集が、立て続けに編まれます。

『境海草』	阿知子顯成撰	万治三年(1660)刊
『埋草』	正法寺成安撰	寛文三年(1662)刊
『貝殻集』	長谷寺秀政撰	寛文七年(1667)刊
『続境海草』	阿知子顯成撰	寛文十年(1670)刊

『寛伍集』	南方由(元順)撰	寛文十年(1670)刊
『塵塚』	池嶋成之撰	寛文十一年(1671)刊
『俳諧発句名所集』	水野頼広撰	寛文十二年(1672)刊
『手繰舟』	阿知子顯成撰	寛文十二年(1672)刊

これらの集に西山宗因（俳号・一幽）の句がたくさん載ります。宗因は大阪天満宮の連歌宗匠で、洒脱で自由なよみぶりが「宗因風」と呼ばれ全国に風靡します。また摂・河・泉・大和の人々がたくさん見え、周辺地域への堺のリーダーシップがうかがえます。

俳風が急テンポに変わる延宝・天和期（1673—84）に高石石齋撰『俳諧珍重集』、浅井正村撰『堺組』、『南元順三物』があります。元禄期には杉井由政撰『まくら笈』、魯鶏撰『俳諧鏡之間』があります。後者には大阪の蕉門俳人が大勢参加しています。正徳三年（1713）の小野田芦帆齋撰『泉陽俳諧作者部類』には谷永重、浅井正村以下17人の宗匠が登載されていて、堺俳壇の大きさがわかります。

堺俳書がつぎつぎ刊行されたころ、堺以外の泉州には40か村、約200人の俳人がいますが、その中で活躍のとくに目立つのは万町村（和泉市）伏屋重賢と尾崎村（阪南市）吉田清章で、ふたりとも天領の大庄屋です。かれらは70歳になった宗因を招いて高野山詣での吟行をします。重賢は、国学（日本古典学）の祖と仰がれる契沖を数年間彼の家に寄寓させて研究を援助しています。

元禄13年（1700）に出版された『泉州志』は、全泉州を扱った最初の地誌として名高い書物ですが、これは重賢の遺志をついで、契沖の懇切な指導のもとに、下出村（阪南市）の石橋新右衛門直之が著述したものです。



品

川崎 浩

「ひん(品)」 ①くらい。等級。②品格。品位。
③たぐい。品種。④しな物。(広辞苑)

そこで「品格」を見ると、

①物のよしあしの程度。しな。②品位。気品。
とある。

又「品位」を見てみると、 ①品格と地位と。②
と③は金銀の地金、鉱石の含有量であり、④人に自
然にそなわっている人格価値。ひん。とあった。

又別に ほんい(品位) 令に定められた新王の位
階。一品(いっばん)から四品(しほん)まであり、
品田(ほんでん)品封(ほんぶ)を賜った。

とあり、よく使われる(品位)とか(品がいい)
というのは之に関連した言葉である。之は別に何か
の本で見た事がある。だから皇太子、皇女方はなん
となく(品)があるのであろう。

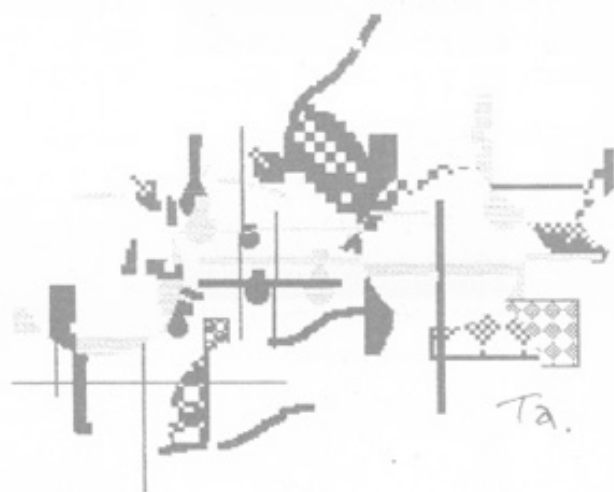
私は蒸気エンジンの模型を作っているが、その機
械工作の師匠にあたるのが近所に住む、いわゆる老
旋盤工である。先日私の工作室(2坪)で、工具箱
の中からドリルの錐を一本とり上げ、「之は品がお
ますなあ」と言う。それは径3ミリのドイツ製のも
ので、よく使うのでそれだけ三倍の値をはずんだも
のである。わずか数センチの小さな錐を一本見付け
出しそれに「品がある」という。その慧眼は別として、
「品がある」という言葉にまいってしまった。五十
年以上も機械工作一途であった職工さんにとって、
刃物はそれこそ身体の一部であったであろう、その
よし悪しが仕事の出来栄え、又収入に直接結びつく、
値段をおしまず手に入る最高のものを使うのは当然
である。しかし、それは「品」があるものが良いの
だという。そしてそれが直感でわかるらしい、試し
て買うものではないから「品(ひん)」のあるなし
で決めるという。出生(メーカー)、育ち(販売店)
そしてそのものの歴史が品を生むらしい。

景観審議会の委員をした時、少し関連するものを

勉強した。中村良夫著「風景学入門」(中公新書)
の中に「風景と品格」というのがあった。少し長い
が引用すると……「わたり六分に景四分」とは千利
休のことばで、「わたり(渡り)」は茶室の飛び石
の使い勝手のことで、その石の打ち方は、わたり六
分におさえ、あとは飛び石の景色を按配せよ……と
いう事であるらしい。又「徒然草」の(第八十一段)
よりの引用として……「損ぜざらんためとして、品
(しな)よく見にくきさまにしなし」で「用」の
どぎつい露呈を嫌い、かといって、「わづらはしく
好みなせる」美へのこだわりをのり超えて、「いた
くこととしからず」というような凡常に徹してこ
そ、「物がらのよき」……すなわち上品というもの
である。……平たくいってしまえば含蓄のある素朴
さである。

「含蓄のある素朴さ」が「品」であるとは直ぐは
承服し難いが、「用」と「美」をどちらも否定して
かかるのが物の品格というものであろうか。

デザインをする時私は無意識の内に、そう心掛け
ていたように思う。



平泉 金色堂

崎田 公明

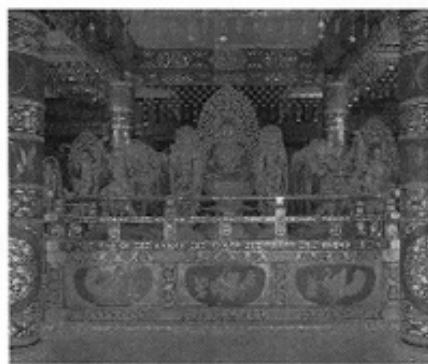
岩手県平泉の金色堂を訪ねた。芭蕉の名句「五月雨を降りのこしてや光堂」のあの金色堂である。今年平成9年が国宝に指定されて百年目にあたり、秘仏の一字金輪佛頂尊坐像がその記念に御開帳されることによる旅行会社のコース設定でもあった。実はここに到着する前に青森の奥入瀬溪谷、十和田湖、それに大湯温泉を、二日目は雄大な岩手山を見ながら26kmの小岩井農場、田沢湖を経て夜に、秋田県大曲市の花火の競演を見た後、三日目の狛鼻溪船下りを終え最後の訪問地が金色堂であった。

東北を旅するのははじめてであったし、まして金色堂の所在地さえ知らない状態でここを訪ねたのであったが、唯一ここだけはその前の二日間と違って異様であった。中尊寺の壮大な境内の一部にある金色堂は大きな入れものといえる新覆堂の中に金色の屋根ごとおさめられており、平安時代藤原三代によって長い戦乱によって亡くなった人々の霊をなぐさめ仏国土を建設するために営々と築きあげられた堂塔のひとつである。それはこんもりとした老杉の中、表参道を登りつめると数々の堂宇があり、その一部に新覆堂がある。中に入ると三間角の皆金色の阿弥陀堂が忽然と現れる。外部の屋根、垂木、柱、内部の天井、内柱、床、基壇、仏像、すべてが金色である。

うす暗くしつらえたその覆堂の中にあってあやしく、まばゆいばかりに、見るものに迫ってくる。その様子は京都の金閣寺や日光の東照宮とも違い、その精緻さ、夜光貝らでん細工、透し彫りの金具、漆の蒔絵等見れば見るほど、よくまあここまでと感嘆するばかりである。

そんなうっとりするようななかで、突然ギクッとするような説明がながれてくる。それはその輝くばかりの中央の須弥壇の中に藤原清衡公、左の壇には二代目基衡公、右には三代目の秀衡公の御遺体（実はミイラ）と泰衡公の首が納められているという。

京都、奈良にも多くの神社、仏閣がある。わたしも少なからずお参りしたつもりであるが、この寺社の中にかつてミイラが納められている例を聞いたことがない。ここにきて今まで体験したことがない、ミイラと金色という組み合わせを知らされることになる。梅原猛によれば「仏教にはもちろん、このようなミイラをつくる風習はない。もしも浄土教が説くように、人間が死ねば阿弥陀仏がすぐ迎えにきて、極楽浄土へ連れていくとすれば、どうして人間をミイラにする必要があるのか。ミイラは明らかに別の信仰からきている。それは首長が死ねば、その死体を毎日妻が洗ってそれをミイラにして葬る樺太アイヌの風習を思い出させる」（「日本の深層、縄文・蝦夷文化を探る」より）



金色堂

金色堂を見るまではこの旅を通じてなんら我々が日常感じているものと違いはなかった。飛行機で三沢空港に行き、それからは、さまざまな自然、変化に富んだ自然、深遠な自然、雄大な自然を見た。

57万人もの人出はあったが大曲の花火、東北地方を縦断している高速道路、新幹線、我々の日頃目にしているものと大小の違いはあってもそんなに違和感はなかった。むしろ東北らしさがなく物足りなささえ感じていた。でも日々の営みのなかの奥深いところで、今でも東北らしさはしっかり生きているのではないか。そんなことを思い起こさせる旅であった。それは、かつて縄文時代の晩期、東北はまさに日本文化の中心地であり、ながいあいだ縄文の風習を捨て去ろうとしなかったこと、やがて弥生時代に塗りがえられてからもしかり、そして二千年前には日本の文化を支えてきた記憶が詩の世界、祭の世界には今でも残っていることと無縁ではあるまい。



ダイトレを歩きませんか

舘野 羊一

堺市の泉北ニュータウンからは毎日のように金剛山脈と紀泉山脈が遠望でき、季節の光の変化に微妙に美しく変化するのを楽しめる。とくに泉北高速の深井駅付近の高架からは幅広く一望できて、その山並みの尾根すべてがダイヤモンドトレールである。

多くの人々がダイヤモンドトレールをハイキングされている。私は今年から歩き始めた新参者であり、長年楽しまれている人も多いので、語る資格はないのだが、始めたばかりの者だからこそその感動を少しでもご紹介したいと思う。

ダイヤモンドトレールとは、横尾山町のバス停から西国札所の施福寺にお参りをし、ボテ峠から滝畑ダム湖畔に下り、カギサコ、茅の原っぱの眺望のいい岩湧山、紀見峠、行者の杉、神福山、千早峠、笹百合を見ながら中葛城山、久留野峠、そしてダイトレ最高峰の金剛山へ。いったん尾根を水越峠に下り、さらにこのルート最大の急坂をあえぎながら登って、つつじで全山真っ赤になる葛城山の尾根を長く歩き、岩船山、平石峠をへて竹内峠と下りる。さらに万葉の森を通り二上山の雌岳、雄岳を登り、穴虫峠に至る。近鉄南大阪線を横切り、奇岩で天然記念物の屯鶴峯を眺めて終わる、この45kmのルートと言う。

すばらしいことは、堺市南部からこの尾根がすべて一望できることである。

医者に健康維持を注意され「歩きなさい。」の一言で、泉北ニュータウンの中の緑道を歩いたり、天野山金剛寺まで歩いたりしていた。あるとき滝畑ダムにドライブに行ったとき、思わぬ山道からご夫婦がスキーストックを持って下りて来て、感動の下山と見たので何うと、「岩湧山からの下山です。」とのこと。「きついのですか」と何うと、「いいえ2時間の登りでの往復です。ダイヤモンドトレールですので、よく整備されていますよ。」このお話しで、軽やかなチャレンジ目標ができた感じを持ったので始めたのである。多くの人々が御存知のこと

だが、日本で一番登山者が多いのが富士山、二番目がこのダイトレの金剛山だそうで、金剛山頂には最高八千回の登山回数の人を筆頭に二千回、千回登山などと人の名前が掲示されている。また二上山、葛城山、金剛山の三つの山と峠を一日で縦走する「三山会」という健脚の会があり、回数が掲示されている。

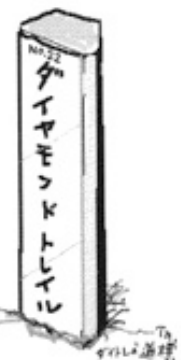
役行者の由来の修験道、楠正成の砦跡、飛鳥路へ、古代文化の往来あとなど、時代時代でいろいろな歴史物語がある。紀見峠では、数学者岡潔博士の誕生地の碑石や、高野街道の「高野山女人堂まで六里」の道標、腰痛をたちどころに治す「腰の神様」など楽しい発見をした。

毎年なのだろうか、犬鳴山からこのダイトレをすべて通り、生駒山までの120kmを8回で走破する会には、なんと1000人の人が参加されている。五月五日に紀見峠から岩湧山に登っているとき、この人々とすれ違ったのだが、山行きのマナーで「こんにちは」とあいさつをしていたのだが、1000人と聞いて途中からあいさつを省略させていただいた。ダイトレは10月の『なみはや国体』の山岳競技の会場でもあり、選手の下見の登山にも遭遇できた。

これほど多くの人々が楽しまれ、山は大賑わいである。健康に良く、ゴルフのように高価な道具やお金は要らない。行っても行かなくても誰にも迷惑を掛けない。単純に黙々と歩き続ける運動は、毎日のストレスから全身を解放してくれます。緑を楽しめるし、空気もいい。そしてダイトレのルートからは自分の住んでいる泉北ニュータウンや大阪湾、六甲山、紀ノ川沿いから高野山、大台ヶ原などを眺望できるのである。

今年の前半で9回に分けて、焦らず天気の良い日に、全コース完歩し終わった。我が町泉北ニュータウンから、一望できるあの山脈の長い高い尾根を全て歩き終わったのである。これはささやかな自慢であり、感動である。下山したときのやり終えた満足感。これもまた楽しみの一つである。

紅葉の季節に、第二回目のダイヤモンドトレールの全縦走をまたチャレンジしたいと思っている。



やさしい言葉で話をしよう

山崎 晶

多かれ少なかれ私達は何かを考えている。考えながら行動する人、考えてから行動する人、行動してから考える人、いろいろあって面白い。お国柄もあるようである。自分はどうか、他人はどう見ているか、興味がある。

それはともかく、私達が何かを考えるとき、それは言葉を使って考えていることに気が付く。日本人はほとんどが日本語で考えていると思われるが、なかには英語やフランス語で考えている人もいて、ややこしくなる。お国が違えば言葉が違い、考えも変わって来ようというものである。考えが違うということはどういうことなのか、考え方なのか、何を考えると言うことなのか。確かに日本語と英語では考え方に違いが出てくるのは当然のように思われる。

では考えたことはどうするのか、すぐ忘れることもありこのように文章にするか、口述で人に伝えようとしたりする。人に考えを伝えようとするとき、相手がやはり正確に此方の意思を理解してもらわないと困ることが多い。人はどう受け取ろうと勝手にすからといって、すましていられる場合だけではない。考えるのに言葉があり、伝達にも言葉がある。言葉には意味があり、その意味を介して共通の意思の疎通が行われる。ただ、言葉によってはたいへん多くの意味を持つものがあってややこしくなる。外国語の文章を読まされるときに、ひとつの単語の意味を決めるのに英和辞書を相手に四苦八苦するのが常である。同じ単語でも意味の取り違えて文章全体が違ったものになってしまうことはよく経験することである。

私たちの母国語である日本語とて例外ではなく、外国語ほどではないにしても、同じようなトラブルは多い。わかりにくい文章というものに出会わずことの多くはこの言葉の意味の決めにくさにある。難解な言葉を用いたり、言葉に自分勝手な意味を持たせ

てわざと文章をわかりにくくさせて相手を煙に巻くこともあるようである。かつての赤軍派のメッセージに見られるそのての文章がいい見本であるが、こんなものは何を言いたいのかさっぱり理解できるはずもなく、打ち捨てるべきものと処理したほうがいい。読むにしても、聞くにしても、頭をひねりながらしなければならぬ文章は、いい文章とは云えまい。もっとも受け取り方の頭の程度にもよるのは事実で偉そうなことを云える立場ではない。正しく自分の考えを理解してもらおうと思えば、相手の程度をみて、解りやすく正しい意味の言葉を使って語る事が大切であろうと云う、当たり前の話であります。

SaDA見学会

■白雪ブルワリービレッジ—長寿蔵見学会

平成8年10月4日(金)大阪ガスのご厚意により貸切バスを提供いただき、96年大阪ガス展の見学と、伊丹市の小西酒造博物館「白雪ブルワリービレッジ長寿蔵」の見学会を行いました。

ブルワリービレッジミュージアム見学後、「ブルワリー」から生まれる地ビール「白雪ビール」と清酒発祥の地、伊丹ならではの銘酒「伊丹諸白 長寿蔵淡にがり」を味わいました。

バスで大阪南港に移動し「街づくり・都市ガスがつくる快適百景」をテーマに展開中の96年都市エネルギーシステムフェアを見学し、楽しい一日を過ごしました。



■新JR京都駅ビル見学会

平成9年10月25日見学会が開催されました。今回は、古都京都の玄関口にあたり、景観論議もよんだ新京都駅ビルを見学しました。

当日は、現地の駅複合ビル内中央の烏丸中央改札口で集合し、参加人数は18名でした。

集合後、岡村理事長が挨拶し、今回の見学を企画された館野理事より、見学内容につき説明があり、崎田理事より京都駅ビルの建物について解説がありました。

まず、ビル内のホテル「ホテルグランヴィア京都」に向い、客室と、普通では見られないVIP専用の客室、また、レストランなどを見学しました。室内は、ホテルにもかかわらず、木の格子を使った和風調のイメージで、アートオブジェを所々に配置し、京都らしさを演出していました。

次に、京都駅構内のVIP専用の貴賓室を拝見しました。贅は尽くしても質素を旨とした室内、什器でした。

あと、高木副理事長の挨拶で散会した。

今回は、館野理事に見学の企画から準備折衝、全てに亘り、お世話になりました。紙面をかりお礼申し上げます。

散会時に、京都駅ビルの正面玄関にて集合写真を撮り、それぞれ興味のある所、ホテル、デパート、ビルの構造？などを各々見学した。

記 岡村 松三



《視察先募集中》

堺デザイン協会では、会員のご紹介で会員でないと見学できないところを募集中であります。ご紹介ください。

堺旨いもの

岡村 筭

旨いあなご寿司がある。口の中に入れるととろけるように柔らかい。秘伝の煮きりタレが塗ってある。あなご本来の旨みが何とも言えないなつかしさと食感である。そのはず、出島にある「深清のあなご寿司」で元はと言えばあなご専門の御し屋さんなのである。当主の深井貞彦さんは祖父より

三代目で四代目がそろそろ休業中である。

その昔、堺の街をとりまく環壕、土居川の南側添いに、出島海岸へ向けて細い道筋が伸びていた。大阪湾のあなごを扱う問屋さんが軒を連ね、別名「あなご屋筋」と呼ばれていたという。その筋の基点大道筋の角には公設市場もあったらしい。ドマルカゴといわれる大きな丸い生け簀カゴにその夜漁れたあなごを入れて商っていた。堺には福藤というあなご井専門の店があったのも子供心に覚えている。その頃は大浜海岸で大魚夜市が行われ、砂浜に直接舟がついて活きのいいタコやびちびちはねた魚が水上げされる光景も縁の裏に焼きついている。



深清鮓 〒590-0834 堺市出島町1丁1-22
TEL 0722-41-4593 9:30~6:00 火曜日定休

《編集後記》

新しく広報委員に指名され、慣れないうちに、原稿募集から編集とあわただしくさせていただきましたが、皆様のご協力により、会報SaDA第18号をお届け出来るようになりました。

会員各位は日夜多忙であられ、その中での執筆をいただきました。

編集委員もやや多忙とはいえ、戴いた原稿のなかには、1年近くお預かりしたままのものもありまして、誠に恥ずかしく、恐縮いたしております。特に永野 仁先生には、原稿を急いでいただいたのに、こんにちの掲載になりました。まことに申し訳ございません。

さて「会報SaDA」は皆様会員各位の交流の場であり、研究発表の場であり、主張の場でもあります。討論なき集まりは楽しくありません。できれば半年に一冊発行いたしたく思っております。研究連載や、デザイン制作報告など、常時募集いたしております。どうぞ投稿載きますよう宜しくお願い申し上げます。

今回はぜひ論評「デザインの世界で動き出したこと」また、意見を言いたいことなどございましたら、お願いいたします。

(広報委員会 館野 羊一)

そうです常時、SaDAは原稿募集中です。

会 報 **SADA** 18号
平成9年12月20日

発行 堺デザイン協会

〒590-0071 堺市北向陽町1-1-7 オカムラデザインプロ内 TEL.0722-29-5011

編集 堺デザイン協会広報委員会
山崎 晶 館野 羊一